コラム

サクラ咲く ～ミラコン挑戦を足掛かりに～

東京都立光明学園　統括校長
田村　康二朗

11月のある日、本校高等部3年の新井うららさんは、「障害者を支えるカウンセラーになる」との夢の実現に向けて、志望する大学の面接に臨んでいました。

面接官A：提出されたキャリアシートに書かれた〝ミラコン出場〟とは、どのような場なのですか？

新井さん：全国の肢体不自由特別支援学校の高校生が、未来をより良くするためのプレゼン〝社会への提言〟を通して競い合うコンテストです。

面接官A：あなたは何を発表されたのですか？

新井さん：私は過去2年間、障害者に対する社会の意識についての提言をプレゼンしました。当初は、社会全体のバリアフリー施設の少なさを問題点にと考えていましたが、調べ進めていく中で、問題はもっと根深いことが分かり、プレゼン内容も変わってきました。

面接官B：どのようなところを問題視されましたか？

新井さん：バリアフリー施設が少ない原因は、社会が私たち障害者のニーズを良く知らないことから生じている側面もあり、その原因の一つは、障害者自身が自らに必要な支援を社会に向けて十分に発信できていないからと仮説を立ててみました。結果としては、ウェブ上や書籍を調べてみても、そうした情報は豊富ではありませんでした。当事者としてのニーズ発信の必要性も含めてプレゼン〝社会への提言〟にまとめて、国語の先生にみていただきました。

面接官A：そのプレゼンは、どのような評価でしたか？

新井さん：先生からは、お褒めの言葉をいただきましたのでミラコン東京地区大会に挑戦したところ、優勝者として全国大会出場権を得られました。さらにファイナルステージでは全国第3位の栄誉を頂戴しました。

面接官B：第3位ですか。それは素晴らしいです。

面接官A：ミラコンを通してあなた自身に変化はありましたか？

新井さん：はい。私は最初、人前で話すことが苦手でしたが、ミラコンが自信につながりました。また、今まで気にする機会がなかった「社会には障害者として生きる上での改善すべき課題がまだまだあること」が意識でき、その解決に向けて自分自身が参画できることを自覚できるようになりました。（以下省略）

通常の高校生たちには、さまざまな○○甲子園・○○全国大会などに出場するチャンスがあり、その挑戦結果を堂々と進路決定に生かしています。肢体不自由の高校生たちにも、そうした機会をとの思いで創設されたプレゼンカップには、多数の生徒が全国各地から挑んでいます。新井さんもその1人です。4月からは大学生。夢に向かって進め！

日本肢体不自由児協会発行はげみ令和5年4・5月号から転載